

キャッシュレス時報

CASHLESS JIHO

長内 智

(株)大和総研
金融調査部
主任研究員

第17回 新しい通貨の発行とキャッシュレス化

① キャッシュレス時代の新硬貨発行

●新500円硬貨の登場

新しい500円硬貨が11月1日に発行されました。当初は、2021年度の上期までに発行するという計画でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により銀行ATMなど現金を取り扱う機器の改修作業が遅れ、発行時期が延期されていました。

日本の500円硬貨は1982年4月に500円紙幣に代わって初めて発行され、2000年8月に2代目の硬貨が登場しました。3代目に当たる今回の硬貨は約21年ぶりの刷新となります。

基本的なデザインや大きさ（直径26.5mm）は変わりませんが、硬貨の中心部分と外側部分で色が異なる「2色構造」を初めて取り入れたことが見た目の大きな特徴です。また、縁のギザギザの溝を一部異なる形状にし、縁の内側に微細文字を新たに組み込むことによって、偽造防止効果を高めています。

●減少する硬貨と増加する硬貨

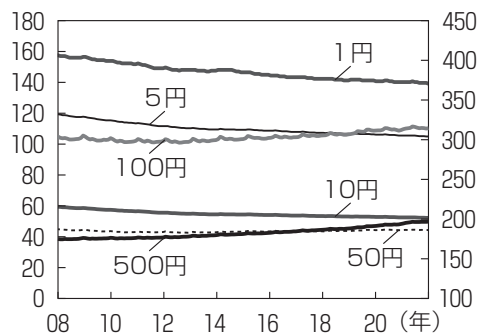
現在、国内で使用されている硬貨は全部で6種類です。日本銀行の統計によると、500円硬貨は約50億枚流通しています（図表参照）。

財務省は、2021年度中に新しい500円硬貨を2億枚発行するとしており、これは現在の流通枚数の4%程度に相当します。もし、この発行ペースが続く場合、新硬貨にすべて置き換わるには相当の期間が必要になるでしょう。

硬貨の種類別の流通枚数を見ると、1円～10円の少額硬貨は減少傾向が続いています。この主な背景は、キャッシュレス化の進展です。1円と5円に関しては、2019年10月に消費税率が8%から10%に引き上げられ、それ以前より10円未満のお釣りが出にくくなったことも流通枚数の減少につながっています。

一方、新型コロナ前までの個人消費の増加などを背景に、100円と500円は緩やかな増加傾向にあります。店舗や自動販売機での支払の際に利用しやすいのが一因だと考えられます。500円に関しては、いわゆる「500円玉貯金」といった貯蓄のための需要も下支え要因となっています。50円は横ばいです。先行きについては、国内のキャッシュレス化が相当進展すれば、流通枚数の増加傾向は止まり、徐々に減少傾向へと転じていくとみられます。

【図表】貨幣（硬貨）の流通枚数



(出所) 日本銀行「通貨流通高」より大和総研作成。単位は億枚。1円のみ右軸。



🕒 古い通貨に使用制限を設ける諸外国

●新紙幣も2024年度に登場予定

政府と日本銀行は、2024年度の上期に1万円、5千円、千円の新紙幣を発行する予定です。紙幣の刷新は2004年以来で、約20年ぶりになります。各図柄は、渋沢栄一（1万円札）、津田梅子（5千円札）、北里柴三郎（千円札）です。なお、2千円は需要が少ないこともあり、新規発行が止まっており、新紙幣も導入されません。

●キャッシュレス化に逆行するのか

新しい通貨（硬貨と紙幣）の発行により、その流通量が一時的に増加することが想定されます。店舗での支払で利用する「決済需要」はあまり変化しないと思われそうですが、新しい通貨を記念として手元に持っておこうという「貯蔵需要」が一部で生じるためです。

ただし、現在、キャッシュレス決済の利用が着実に増加しており、新型コロナウイルスの影響で人の手を介する現金を利用したくないという消費者も増えています。こうした状況を考慮すると、新しい通貨の発行により、日本のキャッシュレス化の動きが逆行する可能性は低いとみられます。

●諸外国でタンス預金が増えない一因

新しい通貨の発行とキャッシュレス化に関しては、日本では古い通貨を非常に長い間使用できる一方、海外の複数の国では、一定期間が過ぎると古い通貨を店舗の支払などで使えなくなるという違いが注目されます。例えば、新型コロナ前の英国は、偽造などの対策として、新しい通貨発行後、約6か月で古い通貨を使用できなくしていました。古い通貨は民間銀行や中央銀行で交換しなければならなかったのです。

こうした国では、日本に比べて、タンス預金をするデメリットがかなり大きくなります。また、キャッシュレス決済であれば、古い通貨の使用期限を考えずに済むため、キャッシュレス化を一定程度促す効果もあると考えられます。

希少価値を持つプレミア通貨

●新500円硬貨の発行枚数が焦点

実物の通貨には、その希少性から、収集家などの間で額面価格より高い値段で取引される「プレミア通貨」や「プレミア紙幣」が存在します。このようなプレミアは、データのみで実物がない電子マネーには存在しません。

硬貨は、製造枚数が少ない年のものに高いプレミアが付く傾向にあります。独立行政法人造幣局の「年銘別貨幣製造枚数」によると、500円硬貨は昭和62年（1987年、277.5万枚）の製造枚数が最も少なく、その次が昭和64年（1989年、1604.2万枚）です。実際、これらは額面価格より高い値段が付きやすくなっています。

新500円硬貨は、2021年度中（令和3年と令和4年）に2億枚発行される予定です。そのうち令和3年のものが何枚になるかが焦点です。すでに、2021年6月21日から製造が開始されていることを踏まえると、製造枚数はおそらく昭和62年や昭和64年に比べてかなり多くなり、プレミアも付かないように思われます。ただ、新型コロナ下で製造枚数が予定より少なくなっている可能性もあるため、実際の製造枚数はしっかり確認しておくといいいでしょう。

●紙幣は記番号の並びを要チェック

紙幣に関しては、紙面に印刷されている「記番号」の並びが重要です。現在発行されている紙幣の記番号は、最初と最後がアルファベットで、その間に6桁の数字が入っています。人気が高いものは数字がすべて同一であるものや、1～6の順で数字が並んでいるものであり、紙幣の状態がよいものほど高額で取引されます。

ちなみに、2004年に新紙幣が発行された際には、日本銀行の複数の支店職員が、めずらしい番号の紙幣を不正にすり替えていたことが明らかとなり、世間を騒がす大問題となりました。

新紙幣の登場はもう少し先のことですが、将来的に手にした際は、その記番号がめずらしい並びでないかぜひチェックしてみてください。